

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34431

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25510020

研究課題名(和文)バリデーションを活用した認知症高齢者への地域生活支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing a Community Livelihood-Support Program for Demented Aged Persons with the Use of Validation Methods

研究代表者

都村 尚子 (Tsumura, Naoko)

関西福祉科学大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40573944

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は認知症高齢者へのコミュニケーション法である「バリデーション」が、認知症高齢者、福祉・医療専門職、地域住民へ与える効果を検証することであり、その成果から認知症高齢者の地域生活支援プログラムを提言することである。バリデーションの実践や研修の結果、認知症高齢者には正の感情を高め負の感情を抑える効果が確認され、福祉・医療専門職や地域住民には認知症高齢者に対する信念を高める効果や認知症高齢者の肯定的なイメージ形成に一定程度効果があることが示唆された。これらの成果から、バリデーションという共通言語を用いることで認知症高齢者を地域で支えるネットワークづくりの一形態を示すことができたと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is twofold. The first is to verify whether "Validation," a method to communicate with demented aged persons, has positive effects on those demented, regional inhabitants, and the welfare and medical professionals who look after them. The second is, on the basis of this outcome, to propose a community livelihood-support program for the demented aged people. The training and practice of Validation exhibits the effect of increasing these aged persons' behavioral and responsive expressions of positive emotions while decreasing that of negative emotions. As for effects on professionals and local residents, it tends to make them more aware of the demented individuals' desires and emotions and more imbued with their positive images. These results suggests that Validation works like a common language to help form a regional network to support demented aged persons.

研究分野：高齢者福祉

キーワード：バリデーション 認知症高齢者 地域生活支援 福祉・医療専門職 地域住民

1. 研究開始当初の背景

わが国は世界で最も速い速度で高齢化が進み、同時に認知症高齢者も激増している。2002年に厚生労働省が発表した『将来推計』では2015年に認知症高齢者は約250万人と予想されていた。しかし、2012年の時点で300万人を突破したと国は上方修正した(2012年8月24日)。2002年の発表が150万人であったことからすると、この10年で認知症高齢者は倍増したことになる。このように増え続ける認知症高齢者への支援は2000年『介護保険制度』の施行(2000年)以降、高齢者福祉分野における最重要課題の一つと捉えられており、2012年2月17日に発表された「社会保障・税一体改革大綱」においても重点課題と位置づけられている。高齢者福祉の現場では、ハード面や人的数的体制は明らかに改善され、新型特別養護老人ホームやグループホームなどが整備されている。しかし、肝心の提供されるケアにおいて国の目指してきた、「“その人らしい”生活を支える」や「地域包括ケアの確立」の考え方は、提供されているケアの質やそれを支えるシステムにまではほとんど反映されていない。

では、このように認知症ケアにおいて、十分に質の高いサービスが提供されていない主な原因はどこにあるのか。それは、認知症高齢者のコミュニケーション力の欠如がケアの最大の障害となっていることにある。すなわち、認知症高齢者が中核症状の進行により、認知能力の低下を招き、時間や場所、人物の概念や言語を失っていく過程の中で、支援する側の人間は当事者が何を考え、何を訴えているかを正確に把握することが困難になる。このことが、認知症高齢者と支援者のコミュニケーションに危機を招き、さらに周辺症状の悪化を招き、当事者と支援者の双方のQOLの悪化を引き起こすのである。この“負のスパイラル”を解消するには、認知症高齢者の思いをより正しく理解するための方法、コミュニケーション法が不可欠である。その方法の一つとして、バリデーショナルがある。

バリデーショナルは認知症高齢者へのコミュニケーション法である。この方法は、認知症高齢者とのコミュニケーションを通じて、感情に訴える精神・心理社会的アプローチである。この方法は米国人ソーシャルワーカーのナオミ・ファイルによって1980年代に開発され、バリデーショナル・トレーニング協会(以下VTI、本部米国ニューヨーク州)によ

ると、北米、ヨーロッパなどを中心に世界で7000以上の施設において実施されている。バリデーショナルは「死を迎える前に、自身のやり残した課題(人生の未解決の課題)を解決しようと奮闘している認知症高齢者に対して、尊敬と共感をもって関わることを基本としている。バリデーショナルは認知症高齢者の行動を分類する方法を示し、彼らが尊厳を回復し、植物状態にならないように援助する簡単で実用的なテクニックを提示する」としている(Naomi Feil,2001)。

これまで、バリデーショナルに関する研究は、トレド大学(米国・オハイオ州)における「バリデーショナルは高齢者の会話パターンにかなりの改善をもたらす」との報告¹⁾や、アーヴィン・メディカル・センター(米国・カリフォルニア州)の研究者らによる「バリデーショナルはリアリティー・オリエンテーションを行うよりも効果が高い。認知症高齢者のひとりひとりの精神、心理的そして感情的な要求をスタッフがきちんと把握すれば、ケアの改善につながる」などの報告²⁾が見られる。しかし、バリデーショナルの効果に関する客観的な報告や科学的データの裏付けは乏しい。

とりわけ、わが国では2002年にバリデーショナルの導入が始められ、国内における研究は数少ない。西岡・都村らによる、グループバリデーショナルは、認知症高齢者において、心理・感情面でのQOL改善効果や認知症の進行を遅らせる可能性があることが示唆されたとの報告³⁾や都村・三田村らによる、バリデーショナルの質的研究による有用性の確認の報告⁴⁾などに限定されている。バリデーショナルの効果を検証することは、認知症高齢者が急増しているわが国において意義があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、バリデーショナルを用いて、認知症高齢者、支援者、家族、地域住民にどのような効果をもたらすかを明らかにし、一連の取り組みを通して新たな認知症高齢者への地域生活支援プログラムを提言することである。そのことにより、ケアの質を担保した認知症高齢者を取り巻く、地域全体へのアプローチの具体的な方法を示すことをめざす。

3. 研究の方法

本研究は、(1)認知症高齢者を対象としたバリデーショナルの効果検証、(2)福祉・医療専門職を対象としたバリデーショナルに関す

る研修の効果検証、(3)地域住民及び家族対象に開発した教育プログラムの効果検証の3つによって構成されている。

(1) 認知症高齢者を対象としたバリデーションの効果検証

特別養護老人ホームに入居する認知症高齢者を対象に、グループで実施するバリデーション実施群と、実施していない群(以下C群)それぞれに対して調査を実施した。

グループバリデーション(以下GV)実施期間、場所、人数は(1)2013年6月~9月・香川県・7名(2)2013年6月~9月・富山県・7名(3)2013年6月~10月・兵庫県・25名である。

GVの実施方法は、1グループ認知症高齢者4~5名、バリデーションワーカー1名、コ・ワーカー2名で構成されており、実施時間は1回30~45分、1週間に1回の頻度で計10回行った。

調査対象者は、特別養護老人ホームに入居する、臨床認知症評価法-日本版(CDR-J)(以下CDR)得点1点以上の高齢者で、性別は女性36名、男性5名であった。

調査方法は、認知症高齢者の感情変化を測定するための尺度である Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale(以下PRS)が本論におけるGVの効果測定として適当であると考え採用した。PRSの評価項目「楽しみ」、「怒り」、「不安・恐れ」、「抑うつ・悲哀」、「関心」、「満足」(各1~5点)について、GV群25名、C群16名を対象に調査を実施した。

分析対象者は、回答に欠損値のあった調査対象者を除いた37名である。「怒り」、「不安・恐れ」、「抑うつ・悲哀」については、評価得点を逆転させた上で、各人のPRS評価項目の得点を合計し、GV群、C群それぞれCDR得点ごとのGV実施前後のPRS得点の比較をWilcoxonの符号付き順位検定を用いて行った。またCDR得点ごとにGV実施前後のPRS得点の中央値の差を算出し、この差の比較をKruskal-Wallisの検定を用いて行った。

さらに、PRS評価項目ごとにGV実施前後のPRS得点の差の比較をWilcoxonの符号付き順位検定を用いて検討し、PRS評価項目ごとにの分析を行った。有意水準は、いずれも $p < 0.05$ とした。統計解析には、IBM SPSS Statistics20を用いた。

(2) 福祉・医療専門職を対象としたバリデーションに関する研修の効果検証

保健医療福祉機関・施設の福祉・医療専門職を対象としたバリデーションにおける研修に参加した161名(兵庫県96名、香川県42名、富山県23名)に対して、研修前後で集合調査法による自記式調査を実施した。調査内容は性別、年齢などを尋ねる基本属性以外に、介護職員のストレス反応を測定するための設問を設けた。介護職員のストレス反応を測定するための設問は、松岡ら⁵⁾による介護ストレス反応尺度とZaritによる介護負担尺度日本語版(J-ZBI)⁶⁾の項目を組み合わせ、これを施設職員におけるストレス反応が測定できるよう一部修正及び追加を行い設定した。調査期間は、2013年6月~10月である。

分析方法は、介護職員のストレス反応を測定するための設問17項目の合計得点を算出し、研修前後における得点の比較をWilcoxonの符号付き順位検定を用いて行った。また介護職員のストレス反応を測定するための各設問について、研修前後における得点の比較をWilcoxonの符号付き順位検定を用いて行った。統計解析には、IBM SPSS Statistics22を用いた。

(3) 地域住民及び家族対象に開発した教育プログラムの効果検証

認知症サポーター養成講座に参加した地域住民を対象に調査を実施した。

講座の実施期間は2014年8-11月、地域と件数は大阪府1件、兵庫県3件である

講座の内容は、認知症サポーター養成講座にバリデーションに関する講座を組み合わせた研修(以下、研修A)と、認知症サポーター養成講座のみを行う研修(以下、研修B)の2種類である。時間は研修A、Bともに90分、認知症サポーター養成講座の内容はキャラバンメイト(認知症サポーター養成講座の講師)によって精査した項目に沿って行い、バリデーションに関する講座についてはVTIが認定した有資格者によって精査した項目に沿って行った。

調査対象は研修参加者のうち、介護現場での介護経験及び家族介護者の経験のない169名とした。

調査は集合調査法にて実施し、研修前及び研修後に実施した。調査内容は性別、年齢などを尋ねる基本属性以外に、認知症高齢者のイメージを問う自由記述の設問を設定した。

分析方法は、研修Aと、研修Bにおける研修前後の認知症高齢者に対するイメージの変化を捉えるため、認知症高齢者のイメージ

を問う自由記述の回答をデータとし、テキストマイニングによる分析を行った。

テキストマイニングは、テキストマイニングのソフトウェアである KHCoder を用いて分析を行った。

4. 研究成果

(1) 認知症高齢者を対象としたバリデーシ
ョンの研究結果

〔CDR 得点別 GV の効果〕

GV 実施前後の CDR 得点別 PRS 得点の中央値の検定結果では、C 群では全てにおいて有意差が認められなかったが、GV 群では全ての CDR 得点で有意差が認められた。さらに、GV 実施前より実施後の方が有意に中央値が高かった。また、GV 実施前後それぞれの PRS 得点の中央値の差を求め、その差を CDR 得点間で検定した結果は、いずれも有意差が認められなかった。以上のことから、GV は認知症の程度によらず正の効果のあることが示されたと考える。

〔感情別 GV の効果〕

PRS 項目(「怒り」,「不安・恐れ」,「抑うつ・悲哀」,「楽しみ」,「関心」,「満足」)での GV 実施前後の PRS 得点の中央値の変化については、C 群では全ての項目で有意差が認められなかったが、GV 群の「怒り」以外の全ての項目で有意差が認められた。有意差が認められた項目に関しては PRS 得点の中央値が、GV 実施前より実施後の方が有意に高かった。「怒り」について有意差は認められなかったが GV 実施後に全ての度数が PRS 得点 5.0 点に変化していることが認められる。このことから、「怒り」に関しても一定の効果があったのではないかと考えられる。

以上のことから、GV は認知症高齢者の不安や抑うつを軽減し、楽しみ、関心、満足を増やすといった情緒の安定に効果のあることが示されたと考える。

〔CDR 得点別各感情における GV の効果〕

CDR 得点別での各 PRS 項目の GV 実施前後の PRS 得点の中央値の変化についてみると、C 群では全てにおいて有意差が認められなかった。GV 群においては、「抑うつ・悲哀」の CDR 得点 3 点と「満足」の CDR 得点 1 点と 3 点で有意差が認められ、GV 実施前後の中央値が、GV 実施前より実施後の方が有意に高かった。3 点のみに有意差が認められたというこの結果については、CDR 得点別の度数が小さいことが影響したと考

えられる。そのためこの結果には留意が必要であるが、認知症の程度が重度の高齢者において、GV 実施後に「抑うつ・悲哀」の程度が低下し、「満足」の程度が増加したことは、高齢者自身の情緒安定につながった可能性がうかがえる。

また、GV 実施前後の度数分布によると、GV 群では PRS 項目のうち「楽しみ」と「抑うつ・悲哀」の CDR 得点 2 点以外では、一定程度の GV の正の効果が認められると考える。

(2) 福祉・医療専門職を対象としたバリデー
ションに関する研修の研究結果

介護職員のストレスを測定するための設問 17 項目の合計得点を算出し、研修前後における得点の比較を行った結果、研修実施前 26.1 点であったものが、研修実施後に 23.1 点となり、有意差が認められた。また介護職員のストレスを測定するための各設問について研究前後における比較を実施したところ、「利用者さんの行動に対し、困ってしまうことがある」及び「利用者さんに対して、どうしていいかわからないと思うことがある」のみ、有意な得点低下が認められた。

認知症高齢者とのコミュニケーション法であるバリデーションは、コミュニケーションにおけるテクニックだけでなく、Erikson のライフタスク論や Maslow の欲求発達段階といった理論を援用した認知症高齢者を理解するための理論的枠組みをもつ。本研究において実施した研修は、バリデーションにおける基礎的テクニックに加え、認知症高齢者を理解するための理論的枠組みを学ぶものである。

本研究における調査の結果、「利用者さんの行動に対し、困ってしまうことがある」「利用者さんに対して、どうしていいかわからないと思うことがある」の得点の低下が認められたが、これは認知症高齢者を理解するための理論的枠組みを学ぶことで、日常業務の中で理解することのできなかった認知症高齢者の言動を理解し、これに対する対応方法を知ることができた結果によるものと考えられる。よって本研究において実施したバリデーションに関する研修は、受講者におけるストレスの軽減につながる可能性をもつと言えよう。

(3) 地域住民及び家族対象に開発した教育
プログラムの研究結果

Jaccard 係数 0.1 以上であることを基準と

して、受講前後におけるそれぞれの回答を特徴づける語を抽出した結果、研修 A においては研修前に「自分 (Jaccard:21)」「家族 (Jaccard:16)」「忘れる (Jaccard:11)」が抽出され、研修後では「感情 (Jaccard:22)」が抽出された。また、研修 B においては、研修前に「自分 (Jaccard:17)」「記憶 (Jaccard:14)」「忘れる (Jaccard:13)」が抽出され、研修後では「物忘れ (Jaccard:17)」「病気 (Jaccard:16)」「行動 (Jaccard:11)」が抽出された。

調査の結果、研修 A においては研修前に「自分」「家族」「忘れる」が抽出され、研修 B においても「自分」「記憶」「忘れる」とほぼ同様の語が抽出されており、それぞれの受講者の研修前における認知症高齢者のイメージに差はないことがわかる。

次に研修後の結果については、研修 A において「感情」が抽出されたのに対し、研修 B では「物忘れ」「病気」「行動」が抽出された。そして研修 B で抽出された「物忘れ」「病気」「行動」は、いずれも認知症における症状の否定的側面に着目した語りの中で用いられていた。一方で、研修 A で抽出された「感情」については、「脳の変化により認知機能のおとろえた人。感情や尊厳はわからない」などの回答からわかるように、認知症の症状による否定的側面だけでなく、残された力に着目しつつ、認知症高齢者を肯定的にとらえる語りの中で用いられていることが確認できた。

よって、認知症サポーター養成講座にバリデーションに関する講座を組み合わせることは、認知症高齢者に対する介護経験のない者により適切な認知症高齢者のイメージを形成する上で有効であると考えられる。

今回、バリデーションの実践や、バリデーションに関する研修によって、認知症高齢者、福祉・医療専門職、地域住民それぞれにある一定の効果を確認することができた。本研究の対象群は、認知症高齢者が住み慣れた地域で暮らしていくための中核となる存在であり、そのネットワーク強化が課題である。その課題のキーワードとして、バリデーションという共通言語を用いることにより、認知症高齢者を地域で支えるネットワークづくりの一形態を示すことができたと考えられる。

<参考文献>

- 1) Fritz,P.(1986,November).The language of resolution among the old-old : The effect of Validation therapy on two levels

of cognitive confusion. Paper presented at the Speech Communication Association, Chicago.

- 2) Dietch, J. T., Hewett, L. J., & Jones, S.(1989). Adverse effect of reality orientation, Journal of American Geriatric Society, 37, 974-976
- 3) 西岡弘晶、都村尚子、狩谷明美「認知症高齢者ケアにおけるバリデーション療法の効果に関する実践的研究」三井住友海上福祉財団,2006
- 4) 都村尚子、三田村知子、橋野健史「認知症高齢者ケアにおけるバリデーション技法に関する実践的研究」、関西福祉科学大学紀要 14 号, pp1-18,2010
- 5) 松岡 英子, 片山 律子(1996)「老人介護のストレス (II) : 介護ストレス反応尺度の開発」『信州大学教育学部紀要』 87, p139-p148
- 6) 荒井 由美子(2005)「家族介護者の介護負担」『日本内科学会雑誌』 94(8), p1548-p1554

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

都村尚子「バリデーション—その有用性と課題について—」臨床精神医学、第 45 巻第 5 号、2016、pp579-583

米澤美保子、家高将明、三田村知子、都村尚子「特別養護老人ホームに入居する認知症高齢者へのグループバリデーション実践効果」神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要、査読無、第 12 号、2015、pp61-68

〔学会発表〕(計 5 件)

都村尚子 学会講演(講習会 D)「バリデーションの理論と実際～認知症高齢者に共感と尊厳を～」日本音楽療法学会第 14 回近畿学術大会、2016.3.20、大阪成蹊大学(大阪府大阪市東淀川区)

家高将明、米澤美保子、三田村知子、都村尚子「バリデーションを用いた地域住民対象の研修プログラムがもたらす認知症高齢者に対するイメージの変化に関する研究」日本社会福祉学会 第 63 回秋季大会、2015.9.20、久留米大学(福岡県久留米市)

都村尚子、米澤美保子、三田村知子、家高将明「バリエーションを用いた地域住民対象の研修プログラムの効果に関する研究」日本社会福祉学会 第63回秋季大会、2015.9.20、久留米大学(福岡県久留米市)

都村尚子、家高将明、三田村知子、米澤美保子「グループバリエーション実践による認知症高齢者への効果(1)」日本社会福祉学会 第62回秋季大会、2014.11.30、早稲田大学(東京都新宿区)

米澤美保子、家高将明、三田村知子、都村尚子「グループバリエーション実践による認知症高齢者への効果(2)」日本社会福祉学会 第62回秋季大会、2014.11.30、早稲田大学(東京都新宿区)

〔図書〕(計 1 件)

- 都村尚子「認知症ケアのためのバリエーション・ワークブック」全国コミュニティーライフサポートセンター、2016、pp1-95

〔その他〕(計 1 件)

- DVD: 監修 都村尚子「認知症高齢者とのコミュニケーション法 実践から学ぶバリエーション」全国コミュニティーライフサポートセンター、2016

6. 研究組織

(1)研究代表者

都村 尚子 (Tsumura, Naoko)
関西福祉科学大学・社会福祉学部・教授
研究者番号: 40573944

(2)研究分担者

松田 美智子 (Matsuda, Michiko)
天理大学・人間学部・教授
研究者番号: 90269746

黒木 ひとみ (Kurogi, Hitomi)
香川短期大学・教授
研究者番号: 60353140

家高 将明 (Ietaka, Masaaki)
関西福祉科学大学・社会福祉学部・講師
研究者番号: 10636236

米澤 美保子 (Yonezawa, Mihoko)
神戸親和女子大学・講師
研究者番号: 10515357

三田村 知子 (Mitamura, Tomoko)
関西女子短期大学・助教
研究者番号: 70624964

(3)研究協力者

坪井志保美 (Tsuboi, shihomi)
小林昭子 (Kobayashi, Akiko)
亀田司 (Kameda, Tsukasa)